

裏表紙

表紙

書 名： 平成 19 年 春季 企画展
富士見の修験道
— 十玉院と般若院 —

出版年月： 2007(平成19).3
著 者： 富士見市立難波田城資料館
本サイズ： A 4 サイズ(210×297mm)
ページ数： 2 2 P

※当企画展の図録は難波田城資料館で販売（在庫の場合）

なか見！検索 コンテンツ：

- ・開催にあたって
- ・目次
- ・ 1 修験道の世界
- ・ 3 『廻国雑記』にみる十玉院
- ・ 5 十玉院とその配下
- ・ 6 摩訶山般若院（1 ページ抜粋）

開催にあたって

修験道しゅげんどうは、日本古来の山岳信仰が仏教や道教などと習合して成立した日本独自の宗教です。山中に入り厳しい修行を積んだ修験者しゅげんじや（山伏やまぶし）は、自然界の神秘的な力により呪術的能力を獲得しました。その能力を用いて加持祈祷などを行い、人々を救済し、現世利益をもたらしました。そのため、修験道は人々にとって身近な宗教になりました。

江戸時代になると、それまで各地を転々としていた修験者は、幕府の宗教政策により定住するようになり、それとともに修験寺院が多数建立されるようになりました。富士見市下南畑の難波田城の跡地にも十玉院じゅうぎょくいんという修験寺院が存在していました。十玉院は本山派ほんざんはと呼ばれる修験集団に属し、日本28先達せんだつ、武蔵9カ寺にも数えられる大寺院で、下南畑の万蔵院、西藏院、水子の般若院など多くの寺院を入間東部地区とその周辺に従えていました。しかし、明治時代初めに修験道が廃止され、廃寺となってしまったこともあり、その実態については不明な点が多く、あまり広く知られていません。

今回の企画展は、初公開となる富士見市指定文化財の「柳下家十玉院文書」と「水宮神社般若院文書」をはじめ、それに関わる修験関係資料を展示し、かつて市内に存在した修験寺院とその歴史の一端を紹介します。

本企画展の開催にあたり、貴重な資料の出品にご快諾いただきました所蔵者、並びにご協力をいただきました関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成19年3月

富士見市立難波田城資料館

目 次

開催にあたって

目次・例言

1	修験道の世界	1
2	十玉院（南城山八幡寺）	2
3	『廻国雑記』にみる十玉院	5
4	十玉院と笹井観音堂	6
5	十玉院とその配下	8
6	摩訶山般若院	9
7	十玉院の塔婆	16
8	十玉院（難波田城跡）の生活と文化	17
9	富士見における修験道の展開	19
10	十玉院・般若院歴史年表	20
	展示資料一覧	21
	参考文献一覧	22

例 言

- 1 本書は、平成19年3月17日（土）から5月13日（日）まで開催する平成19年春季企画展「富士見の修験道—十玉院と般若院—」の展示図録である。
- 2 本書と展示の構成は一致せず、図版の順序と展示資料番号も異なる。
- 3 展示資料のうち本書に登載していない、または本書に登載し展示資料にないものもある。
- 4 本企画展の企画・構成及び企画展示図録の編集・執筆は、富士見市立難波田城資料館職員石塚宏明が行い、会田明・和田晋治・駒木敦子の協力を得た。
- 5 展示及び図録の写真は、撮影を和田と石塚が行った。

協力機関 川越市立博物館 笹井観音堂 志木市立郷土資料館 大應寺 中道不動堂
(敬称略) 本應寺 水宮神社

協力者 伊藤宏之 岡田賢治 小山健次郎 田口哲也 鳥越多工摩 篠井良観
(敬称略) 三上和子 水宮三衛 水宮亘 柳下東三郎 横田正志

修験道の世界

修験道は、修験者と呼ばれる僧が山岳修行を行い霊的な能力を得ることで、民衆を救済する宗教です。その起源は古代にまで遡り、神仏習合により修験道は誕生しました。江戸時代には講や芸能という形で一般民衆に広まり、明治政府に修験廃止令を出させる程の影響力を持っていたと考えられます。

修験道のはじまり

修験道誕生の発端は、奈良時代から平安時代にかけて自然崇拝を行う神祇信仰と、仏教信仰が交わるようになったことでした。平安時代の終わりになると本地垂迹説（仏菩薩は仮の姿として日本古来の神々〔自然神〕となり現れたとする説）により神と仏を一緒にすることが積極的に行われ、このことにより神祇信仰と仏教信仰が同化していきます。そして、それらの神仏と密教、道教、儒教などが結びつき、修験道は、平安時代に独自の宗教体として成立しました。

開祖役小角

修験道は、すでに他界していた役小角えんのかづねを開祖としました。役小角は、特殊な呪術を使うことで名声を得た人物です。しかし、当時の政治下では「まやかしの言葉で民を惑わす」として、処分の対象になり、文武3年(699)に伊豆の島に流されてしまいました。その後、役小角に関する多くの説話が平安時代に生まれ、鎌倉時代になると役小角は修験者の理想とされました。

修験者と信仰

修験道は実践を重んじる傾向があり、特に山に対する信仰（山岳信仰）を主にしています。

修験者は、熊野（奈良県・三重県・和歌山県）などの山中で修行（入峰修行）することにより神がかり的な能力を手に入れ、呪術的行為を行えるようになりますと言われています。体得した霊能力を使い、予言や治療、悪霊退散など、人と神仏の間を取り持つ役を行いました。修験者の中には修行を究め「先達」と呼ばれ、参詣者（檀那）の入峰時に道先案内人を務める者も出てきました。

教団の誕生

修験道は、中世に天台宗系の本山派（京都聖護院）と真言宗系の当山派（京都醍醐寺三宝院）が確立し、二派に分かれました。両派の修行は大峰山で行われ、入峰回数により階級が与えられました。

本山派は聖護院門跡道興どうこうの廻国により北陸・関東の修験寺院を傘下に入れ、勢力を拡大していきました。江戸時代に大峯入峰の大行事を行い、全国の本山派修験寺院に号令をかけて2万人を参加させました。

一方、当山派は近畿地方の真言宗系山伏が当山方大峯正大先達衆を結成したのが始まりです。江戸時代になると本山派との間で対立がおこり、醍醐寺三宝院跡を棟梁としました。しかし、しばらくして醍醐寺三宝院が当山派寺院を直接の傘下に入れ始めたため、当山方正大先達衆と対抗しました。

また、聖護院と醍醐寺三宝院は、地方の関係の深い寺院に、檀那の参詣案内や祈禱、修験者の統治を行う年行事職（後に檀那への配札や七五三祓いなどを行う）を与えました。その結果、聖護院と醍醐寺三宝院を頂点とする寺院支配体制が確立しました。

江戸時代の民衆と修験道

江戸時代になると、江戸幕府の政策により修験者は人里に定住し、霊的な力で民衆の苦悩や災難の救済を行いました（里修験）。また、修験者は地域の住民と密接な関係を築き、御岳山・大山等の山を信仰する講や歌舞伎・能・狂言・獅子舞等の芸能にも関わっていました。

衰退と復興

明治時代になると政府は、国家神道化を進めました。明治初期には神仏分離令が出され、明治5年（1872）には、修験道廃止令が出されました。そのため、修験道は壊滅状態になりました。しかし、信仰は維持され、講などが修験者の受け皿となりました。戦後になり信仰の自由が保障されると、修験者達は修験道を復興し、現在にいたっています。

『廻国雑記』にみる十玉院

『廻国雑記』は、京都聖護院の聖護院門跡(院主)である道興の旅路を記したものです。道興は、文明18年(1486)6月上旬に京都を発ち、その旅路の途中に大塚の十玉院に宿泊しました。その後、甲州に向かいます。十玉院に滞在した間、武蔵野の名所や寺院、大石氏の館を訪れています。

道興は十玉院に向かう途中、半沢(深谷市か)から「名に聞きし霞の関」(川越市霞ヶ関か)を越え、恋ヶ窪(国分寺市)で歌を詠みます。そこから、宗岡(志木市)の宿に泊まり、所沢市周辺を移動しながら、笹井(狭山市)の観音堂で4・5泊し、「武州大塚の十玉」に向かっています。

以下、記述内容から十玉院の場所や交友関係を考えてみたいと思います。

【記述1】

…佐西を立ちて、武州大塚の十玉が所へまかりけるに、江山幾度か移り変わり侍りけん、…

武蔵国には大塚と言われる地名が多く存在しているため、十玉院の場所は特定されていません。しかし、可能性のある武州大塚の地名は、河越荘(川越市)・入東郡館村(志木市)・比企郡(小川町)・多東郡(青梅市)等にありま^す。特に有力なのは川越市説と志木市説ですが、川越市の大塚は『新編武蔵風土記稿』によると江戸時代になってから地名が付けられた可能性が高く、中世の頃から存在したのか疑問です。志木市の大塚は、現在の志木市館にあたりま^す。昔は「大塚」と呼ばれ、周辺には「十玉谷」「御坊下」等の修験に関わる字名を残しており、十玉院との関係を連想させま^す。

道興は、弟の前関白近衛政家と大石氏の娘(十玉

房と大石氏の子)が結婚したことで、大石氏と親戚関係にありました。そのため、道興は十玉院に滞在していた頃に何度か大石氏の館を訪れています。

【記述2】

或時大石信濃守といえる武士の館にゆかり侍りて、まかり遊び侍るに、庭前に高閣あり、矢倉などを相かねて侍りけるにや、遠景勝れて、数千里の江山眼に書きぬとおもほゆ、あるじ盃を取出して、暮すくるまで遊覧しけるに、…

【記述3】

野遊の序に、大石信濃守が館へ招引して侍りて、鞠など興行にて夜に入りければ、二十首の歌をすすめけるに…

道興は野遊びのついでに大石氏の館を訪れており、十玉院と大石氏館は近くにあったと考えられます。大石信濃守の館は、「滝の城」(所沢市)と「柏の城」(志木市)が有力であり、同じ柳瀬川流域に十玉院が存在したと考えるのが妥当でしょう。

そして、道興は大石氏の父の三十三回忌の後、武蔵野の端である濱崎を訪れています。

【記述4】

大石信濃守の父三十三回忌とて、さまさまの追修を致しけるに、聞き及び侍りければ、小経を花の枝に付けて贈り侍るとて、…(中略)むさし野の末に濱崎といへる里侍り、かしこに罷りて、…(中略)此程ながなが住みなれ侍りける旅宿を立ちて、甲州へ赴き侍りけるに、坊主の殊の外に名残を惜み侍りければ、…

濱崎は今の朝霞浄水場周辺であり、大石氏の館・濱崎と十玉院は、近隣に存在したことがわかります。

上記から、道興は十玉院にいる間、柳瀬川・新河岸川沿い(入東郡・新倉郡・河越荘)で活動していたことがわかります。以上から、十玉院は、志木市にあった可能性が高いのではないのでしょうか。



大石氏系図 木曾大石系図『新編武蔵風土記稿』参照

十玉院とその配下

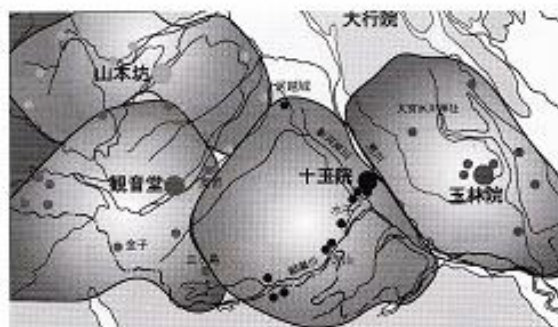
富士見市周辺には、中世から続く修験寺院が多数あり、本山派が勢力を持っていました。本山派で十玉院と肩を並べる寺院には狭山市の笹井観音堂、さいたま市の玉林院(玉林坊)、毛呂山町の山本坊、鴻巣市の大行院があり、これらの寺院は周辺の本山派寺院をまとめ、十玉院とともに先達となり、檀那(参詣者)を持つことや年行事を行うことを許されていました。

江戸時代になると、修験道の大寺院は、「霞」と呼ばれる支配領域を持ちます。「霞」とは修験者が祈祷を行い、配札を行える地域です。十玉院は、入東郡の「霞頭」となり、周辺寺院をまとめる立場にありました。そして、十玉院に従った寺院は「霞下」と呼ばれました。江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』などの史料から、その上下関係を窺うことができます。

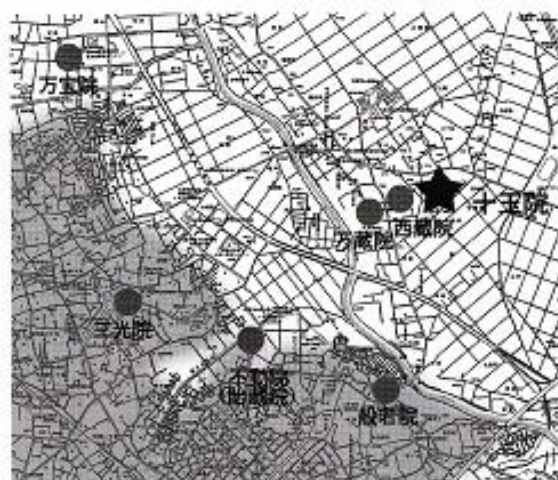
富士見市内には、南畑の万蔵院と西蔵院、水子の般若院(水宮神社)と胎蔵院(不動院)・大仙院(所在不明)、勝瀬の万宝院(榛名神社)があり、十玉院の霞下でした。また、市外にも藤久保の東乗院(三芳町)、小仙波の金蔵院(川越市)、上安松の玉宝院と城の龍蔵院・坂之下の大学院(所沢市)、久米川の泉学院と行蔵院(東久留米市)がありました。

十玉院は、入東郡や新倉郡の年行事職を務めていましたが、年行事や加持祈祷を一寺院で取り仕切るとは困難であったと思われます。そこで、十玉院は聖護院との間をとりもち、役職を与えることで周辺寺院を配下に取り込み、その地域を治めていったと考えられます。配下となった寺院もまた院号や袈裟の着用を許されることで修験者としての身分を保持でき、修験道の活動を行えるため、十玉院にしたがっていたと考えられます。

また、霞下の中には、特殊な役職を務める寺院もありました。特に市内にあった寺院と十玉院のつながりは強く、万蔵院と西蔵院は十玉院の役僧として活躍しました。両院は十玉院の片腕となり寺務や補助を行いました。



富士見市周辺の修験寺院勢力図



富士見市内修験寺院



十玉院霞下修験寺院

摩訶山般若院

この項目内から、その1ページ抜粋



結袈裟・梵天・螺結 水宮神社蔵
 梵天は房の色で階級が分けられています。螺結は、修験者を守る結界を意味し、入峰時にはザイルとして使用します。



修験者装束図 (本山派)



念珠 水宮神社蔵
 念珠は半分ずつの所に母珠と緒留の大きな珠があり、それぞれを仏界、衆生界とみなします。



最多角念珠 水宮神社蔵
 最多角念珠は角が多く、手で角がすり減るほど押し揉むことで、百八煩惱を砕きます。



道中手形 水宮神社般若院文書 水宮神社蔵
 文政12年(1829)か
 伊勢参宮から帰る時の道中手形です。大津を出発し伊勢路と木曾海道を通り、熊谷宿を経て川越に到着しました。



奉納祝祭水神宮 水宮神社蔵 嘉永3年(1850)
 3月に水神宮祭が行われ、船頭達が水難消除などの祈願をしたことがわかります。